

博物館だより

No.148



平成31年3月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都市みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

◆博物館NEWS

平成30年度企画展 シリーズ「みやこの先人」たち

島山鶴雄展「放送機の神様」と呼ばれた不撓の技術者

会期・3月9日(土)〜4月21日(日)

みやこ町の中でも豊津地区は、地内の旧藩校「育徳館」が人材育成機関の役割を果たしたことから、近代日本を牽引した逸材の宝庫のようでした。岩垂邦彦(NEC創業者)堺利彦(社会主義思想家)葉山嘉樹(プロレタリア作家)等枚挙にいとまがありませんが、本展で取り上げる島山鶴雄もその一人です。

島山は旧藩子弟で幼少期を豊津で過ごし大正十二年、旧制豊津中学(育徳館の後身)を優秀な成績で卒業。明治専門学校(現九州工業大)を経てNHKへ奉職し、時代の最先端を担っていたラジオ技師となります。

国内各所や事変只中の上海で豊富な現場体験を積み昭和十三年、機器製作に当る新郷工作所(埼玉県)へ赴任。厳しい戦況下で放送機制作を通して国防に従事する一方、後進の育成や技術書の著述に努め、いつしか工作所は「島山学校」と呼ばれて昭和二十六年まで全国放送技術者の聖地の如く仰がれました。

島山はその後テレビ放送も手掛けて前島密賞等を受賞、遠く中東へ技術指導にも赴いて高く評価され遂には「放送機の神様」

と呼ばれるようになりました。

本展資料は島山氏ご遺族から寄贈頂いた遺品類を中心に殆どが初公開となるものです。ぜひご覧下さい!



▲島山鶴雄(1906~2005/壮年期肖像)



▲上:録音盤(レコード)/下:計算尺

●主な展示資料

- *小笠原忠忱肖像(油彩)
- *小笠原文庫「豊前育英会資料」
- *島山鶴雄資料
- ・上海放送局の広報用録音盤
- ・摩耗した愛用の計算尺

●観覧料 大人 200円

高校生以下 100円

●開館時間 9:30~17:00

●休館日 月曜及び祝日の翌日

◆講座・教室・催し物ガイド 3月の歴史講座

【漢詩紀行講座】

3月2日(土) 9時30分

【古典かな講座】

3月16日(土) 9時30分

【古文書講座】

3月21日(木) 10時

【みやこ学講座】※現地見学会定/詳細別途

3月23日(土) 9時

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途ご案内します。

博物館で「楽習」 始めませんか?



▲ボランティアによる児童向け「むかしの暮らしと道具」ガイド

博物館は郷土資料と学芸員らのサポートによる知と学びの拠点です。以下の会や講座を利用して楽しく学びませんか? 詳しくは博物館まで気軽に問合せてください!

○博物館友の会

バスハイク・歴史たんけんウオーク等の学びの旅に参加できます。

○文化遺産ボランティア体験講座

町の宝をガイド&ガイドするスタッフを募集・養成する講座です。今からでも町外からでも大丈夫です。

12~2月の業務日誌から

みやこ町内にある国作八反田遺跡から出土した遺物について12月4~5日に愛媛大学、明治大学による調査が行われました。1800年前の木製機や青銅器などの希少な遺物から国内でも非常に注目される重要な遺跡であることが分かりました。

2月6日(水)黒田小学校3年生の32名が「昔の道具」について学習しました。校区内の「黒田エノヲ遺跡」から出土した約2000年前の土器には、現在の技術でも復元できないものも含まれ、当時の技術の高さに驚きの連続でした。



▲この地域の弥生時代の遺跡を見直すきっかけになりました。遠方からの調査お疲れ様でした。



▲校区内の地下から出土した2000年前の道具に興味津々。ご先祖様が使っていたもの?

みやこの歴史発見伝 114

よしだますぞう 吉田増蔵(その八)

「漢学者」森鷗外について②

改元記録の公表について

三十年以上、人々に親しまれてきた「平成」の元号ですが、その考案作業に携わった人物や詳細な作業内容、選定の経緯については全てが公表されていない。未だ不明な点が多くみられます。改元が迫った

昨今、「平成」元号制定に関する一部の記録が公開された例もみられますが、改元記録の公開が全て完了するのは、「平成」終焉後もしばらく時間を要するものと思われます。このような傾向については、過去の元号についてと同様であり、元号の考案作業自体がいかに機密性の高いものであるかが伺えます。

今回は、森鷗外と吉田増蔵がどのような経緯をたどって「昭和」の考案に至ったのか、その詳細について、これまで公表されてきた情報や地元における調査の結果などを踏まえてご紹介いたします。

森鷗外と「元号考」

森鷗外は、かねてより「明治は中国、大正はベトナムでそれぞれ使用された年号である。」としてこの二つの元号制定について疑問を唱えていた。

そのため、大正に次ぐ元号については国内外で使用されていない「完璧な元号」の考案作業に挑むため、一年半をかけて歴代天皇のおくり名の出典を考証した「帝諡考」を大正十年（一九二二）三月に刊行しています。

これに引き続き、大化から明治まで二四〇あまりの元号の考証をまとめた「元号考」の作成に着手します。これは大正に次

ぐ元号考案の基礎データ作成を目的としたものでした。

この頃から鷗外の体は病により次第に衰弱してゆきましたが鷗外は病魔に侵されながらも生涯をかけた仕事として文字通り命がけで「元号考」の作成に取り組みます。大正十一年（一九二二）六月十五日以降、鷗外が図書寮に出勤できなくなったため、増蔵は鷗外の自宅に赴き、「元号考」の執筆を手伝います。しかし軍医であった森鷗外は、皮肉にも自身の病状の進行具合を誰よりも知ることになり、その

状況を見極めた結果「元号考」の研究を吉田増蔵に託すことを決定します。また、鷗外は、自身が執筆できなくなったことを想定し、「日記の代筆」も増蔵に託しています。これにより増蔵は六月三十日から六日間、鷗外の日記の代筆を行いました。鷗外は、大正十一年（一九二二）七月九日に自宅で亡くなっています。鷗外の意志を引継ぎ、吉田増蔵が「元号考」を完成させました。

「元号考」とその評価 「元号考」は、鷗外

森鷗外の信頼と期待

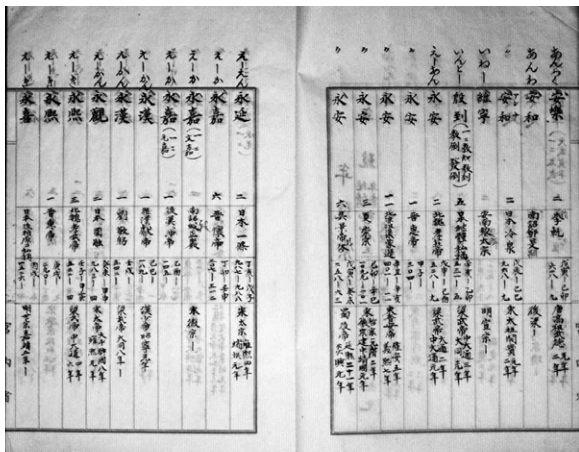
鷗外は遺言書に、愛蔵書の漢籍数千巻について、「余が死したらば之を吉田増蔵君に贈るべし。吉田君の外善く之を用ふるものなし」と記しており、鷗外が増蔵をいかに信頼し、その才能の高さを認めていたのかを物語るエピソードです。元号が「昭和」に決定した事により、増蔵は、鷗外の意思を継いだ「後継者」と認められるまでになり、現在の天皇陛下の称号・名前をはじめ、高度な漢学の知識が求められるものや、政治的に大変重要な局面に出される詔勅等の起草に携わることになりました。また吉田増蔵は、漢詩を通して与謝野鉄幹・晶子夫妻との交流があり、高橋是清（後の総理大臣）から英語を習うなど、教科書等で名前を目にする人物との豊かな交友関係も言うことが出来ます。



▲大正に次ぐ元号考案作業時の草稿

軍医、文学者だけではなく、漢学者としても超一流であった森鷗外がその能力の高さを認め、自身が最もやり遂げたかった業を託され、それを見事にやり遂げた吉田増蔵という人物の功績を後世まで広く伝えてゆきたいものです。

【井上信隆】



▲元号「昭和」考案の際に使用された国内外の元号一覧